



英語國民の一大宝库

(マザー・グースに就いて)

松原至大

幼児の保育ということに関心を持つものが、片時もなおざりにすることのできないものの中に、幼児のための歌がある。童謡という言葉を、そのまま使つてもよいであろう。いうまでもなく、これは全世界の民族の間で、まちがいなしに言えることである。従つてその国の風俗習慣によつて、さまざまな内容と形式とがある。しかもいろいろと推移、変遷、消滅、発展の跡が認められる。そして永い年代の間に、価値あるものばかりが残されて行く。内容的にも、表現形式にも、もう一つ芸術品としても。

こうした意味から、私たちが最も接近している英語國民が永い伝統をもつて誇り得るものは、「マザー・グース」童謡集である。この度倉橋先生が發意されて、戦後のわが国の幼児のために、「キンダー・ブック」十一月号誌上で、この尊い童謡集を再検討されたのは、まことに時宜を得たことといえよう。その仕事の一員として、私も参加させて頂いたことは、大きな喜びである。私は同誌の解説欄で、「マザー・グース」の由来

その他を大略述べたが、ここでもう少し詳細に記させて頂く。

私たち児童文学に専念するものが、イギリスの児童読物史として信頼する好著に「チルドレンス・ブックス・イン・イングランド」というのがある。著者はF・J・ハーヴィ・ダートン氏で、發行所はケンブリッジ大学出版部である。私が持つてゐるのは、一九三二年版である。この書は、今日に至る五世紀にわたる児童の社会生活を觀察した成果である。その第六章「フェアリー・テールとナースリ・ライム」を見ると、「マザー・グース」という名の出所が理解される。「童話と童謡」の章と訳してもよいであろう。

ダートン氏の説くところによると、童話と童謡とが、児童図書館の真に自然な重要品となるまでの過程を物語る歴史は、なおざりと念入りな迫撃下における力強い自己保存の記録である。児童のためのものならば、なんでも図書館にしたいという夢を持つていたと伝えられるロンドンの出版業者ジョン・ニューベリー(一七一三年—一六七年)さへも、身近にあつたこうした

材料には、あまり心を注がなかつたというのである。だが、彼は童話ものに比べて、童謡の方は、少からず手がけたといえよう。救い手とか、独創的な探し手であつたと言われぬにしても、これはニューベリの個人的な考えによる努力ではなくて、当時の社会現象といえるであらう。

例えば、「長ぐつをはいた猫」とか、「月をとぶ牝牛たち」とか「パンバリのゆり木馬」などというわが国でもよく知られた童話は、十八世紀の知識層とも思われる中流階級の興味を、ほとんどわかし得なかつた。従つてこうした出版物は、まだ「商業企画」とはなり得なかつたのである。ジョージ一世からジョージ四世に至る間の人たち、すなわちジョージアンたちには、「敬意をはらうべきもの」ではなかつた。百姓たちの馬鹿ばなしと見なされていたのである。従つてそれは活字に組まれる名誉も持てず、チャップブックと名づけられて、行商人が読み売りした安本さへ、なかなか手口にはいらぬ地方で、人の口から口へ語り移されたに過ぎなかつた。十七世紀時代には、モラーリストたちからいやな目で見られ、十八世紀には、ルン一学派の人たちからは、むずかしい顔をされた。

こうは言うけれども、童謡と童話のいづれが早くプリントになつたかという点、童話の方であつた。ふしぎなことである。その理由は、フランスの宮廷から、イギリスの児童たちの手に渡つてきたのである。もしこうしたアリストクラティックな養育と同じものがなかつたら、それはフランスに残されたままであつたかもしれない。フランスではその物語が持つ特異な内容が、在来のみやびたことに対してひなびたという一つの口実になつたのである。ひなびたということ、田園詩的であるとい

うこと、これがネオクラシカルなモデルとして、時の皇帝ルイ十四世の下で流行となつた。百姓たちがその子供たちにあからさまに語り伝えた物語が、みやびたサロンのつれづれに、磨きをかけられた。そして多くの作家が、競つてそれを文学にまで持ち上げた。その中でも最大といわれる作家は、シャルル・ペロー（一八二八年——一七〇三年）であつた。なぜ最大であるのかといえば、彼は飾るところが、少なかつたからである。これがダートン氏の説くところである。

ペローは千六百九十八年に、これまでに発表したものをまとめて、パリで出版した。書名は「イストワール・ウ・コント・デュ・タン・パッセ、アベック・デ・モラリテ」というのであるが、これを今日の言葉でいえば「教訓昔ばなし」である。この五巻目が、童話集であつた。これはペローの子、P・ダマンクールの作と伝えられる。口絵には、糸をつむいでいる一人の老婦人が、三人の子供にお話をしてるところが描かれて、そこに有名な「コント・デ・マ・メール・ロウ」、英訳して「テール・オブ・マザー・グース」の文字が記されている。

これに対応して、アメリカの研究書にはボストンのトーマス・フリートという人が、千七百十九年に「マザー・グース」のメロディを伝えていると記したのもある。だが、これには確固とした年代的論拠が見出されていない。

とにかく「マザー・グース」の名を持つた童謡集を、最初に出版したのは、やはり前に記したジョン・ニューベリである。千七百六十年のことで、当時彼はロンドンのセント・ポール寺院の境内に住んでいた。年表を開いてみると、わが国の宝暦十年徳川十代家治將軍の時代、二月には江戸の大火があつた。アメ

リカ版はそれよりもおかれて、十八世紀の半ば過ぎ、マサチュセツ州ウォースタ市のイザイヤ・トーマスの手になつた。どちらも収められた歌の数は、五十一しかなかつたということである。五百を越える今日の一大集成となつたのは、長い間にいつとはなしに一つ一つ加えられて、大人の生活とも、子供の生活ともはなれることができなくなつたからである。

私どもが「マザー・グース」の名は、よく知つていて、数多いその原書にあふれている挿絵に心をおどらせても、それほどに歌そのものになじみ得なかつたのは、言うまでもなく風俗習慣がちがつているからである。しかしながら今日は、世界が一つの国となる方向に、あらゆる民族が手を取りあつてゐる。それに伴つて文化の交流が日に日に度を増している。この時にあつて、英語国民があらゆる形において人間性の美しさ、正直さ、明るさをほこるための一大宝庫ともしてゐるこの一大集成の中から一つでも多く味つて、自らのものとするようにつとめることは、私たちの大きなプラスと信ずる。

私はこの度のよき試みにあつて、幼い人たちのために、できるだけ理解しやすく、香の高いものを選んだ。その中から更に倉橋先生が豊富な体験によつて十数篇を選ばれたのである。私がよりどころとした原書は、ロンドンのジョージ・G・ハーパー版「マザー・グース」と、ニューヨーク・マクミラン版「エブリ・チャイルズ・マザー・グース」の二冊である。マクラミン版はキャロリン・ウェルス氏の編になるもので、巻頭には、

「あらゆる年の子供さんよ、
どうぞこのページをお読み下さい。

ここには古いお友だち、

新しいお友だちがいるのです。」

とうたい出した序詩が掲載されている。それには彼の地のおばあさんから、おかあさん、おとうさんへ、それから子供たちへ伝えられて親しみのある「マザー・グース」の中の主人公たちの名が、いくつか並べられて、

「こういう人たちが

あなたを待つていますよ。

だからこの本を

おしまいまで読んで下さい。

音調の美しい歌を読んだり、

面白い絵を見たりすると、

その見事さにおいて、楽しさにおいて、

またはお役に立つことにおいて、

マザー・グースに勝る

今日の教えはないと、

みなさんはおつしやるでありますよ。

いずこの國土にあつても、風土にあつても、

むかしと今とを問わず、

マザー・グースの歌に及ぶ

音調の美しさは、ほかにありませんよ。」

と結んでゐる。